

## 研究発表

### 春雨物語—創造性の停滞—

#### *Harusame Monogatari*—Stagnation of Creativity

萱 沼 紀 子\*

*Ugetsu Monogatari* and *Harusame Monogatari* are Ueda Akinari's representative works. Though *Harusame* was written after an interval of more than thirty years, it lies on the same plane as the *Ugetsu* in his thought and attitude. Even so, there is a drastic difference between the two in the creativity of the works.

The creative quality of Akinari's works consists in his burning passion. Akinari transmitted to his readers the strong feeling he had towards his materials. Hence the beauty we find in *Ugetsu*. But there is very little passion, if any, in *Harusame*. Here lies the basic difference.

Though there was no change in Akinari's creative power, there was a stagnation of his power to concentrate his passions on his creative work. In *Harusame* his consciousness wanders about, and there is mere enumeration and repetition of matters which seem irrelevant to each other, and there is no unity.

---

\* KAYANUMA NORIKO [現職] 作新学院女子短期大学教授

Akinari attempted to cover these defects by pursuing one line of his thought or belief. But the result was a failure. This does not mean that Akinari's sensibility collapsed, but simply that it had stagnated. *Harusame* was written just as he was suffering from the stagnation of his creative power.

文学研究の究極目標は、作家の天才性を解明することにあると考える。上田秋成という、この江戸時代の作家は、まさに天才とよぶにふさわしい素質をもっており、彼における創造性の秘密を探ることが、その作品の特徴を明らかにすることにもなる。筆者は既に拙著『秋成文学の世界』（笠間書院、1979年）において、秋成文学の創造性について分析し、彼の燃える熱情こそその中心であることを述べた。秋成の『雨月物語』とは、彼の熱情がみごとに結晶した作品なのである。しかるに、30余年経て書かれた『春雨物語』をみると、思想的にも、創作態度にも、『雨月物語』と根本的変化は認められないにもかかわらず、大きな断絶が生じているのを感じず。それは『春雨物語』には、あの燃えるような熱情が稀薄になっていることである。今回は秋成文学の負の面について分析したい。

秋成の熱情が稀薄になったとは、どういうことか、以下に少しく説明をすることにしよう。『春雨物語』の7番目に位置する「捨石丸」を例に引こう。この物語が、耶馬溪の青の洞門を切り開いた禅海伝承を題材にしたものであることは、多くの論者の指摘する如くである。禅海に関する文献は、梅園拾葉や甲子夜話などに見られる限りでは、敵討の話しなどなく、巖を切り開く禅海師の求道の姿勢を伝えている。しかし、禅海の墓がある羅漢寺には「切通し禅海坊敵討之目録」なる一文があったと伝えられるから、何らかの原形となる伝承があったろうと推測される。さて、秋成は「捨石丸」で何を描こうとしているのだろうか。話しは転々として、焦点が定らない。だいたい主

人公が捨石丸なのか、小伝次なのかすら明らかではない。冒頭部をみると、「小田の長者と云人あり」として、長者の子供に小伝次とその姉豊苑比丘尼なる者が紹介されて後にはじめて捨石丸が長者の幫間的存在として登場してくる。物語の前半では、長者と捨石丸と小伝次とのからみあいから、父長者の病死へと至る過程が描かれ、小伝次中心に進展する。捨石丸は長者殺しとされ、村を出奔したと説明されるにすぎないのに、小伝次は敵討を国の守に命ぜられ、強い大丈夫に成長するまでの様子が描かれているのである。後半になると、捨石丸に話しが移ったかにみる。江戸に出て角力になり、遂にはさる国の守の幫間となって、九州へわたり、酒毒にあてられ腰が立たぬようになったため、洞門を切り開く決意をするに至るまでが、簡単に述べられる。しかし、小伝次の捨石丸を追っている様子も語られ、遂に小伝次が捨石丸を探しあてた二人の対面の場面は七対三で、小伝次が多く描かれている。このことは秋成も気になったとみえ、天理卷子本では、捨石丸が自らを語る言葉を大幅に増し、小伝次と同等に扱おうとしている。このように、「捨石丸」では、秋成は捨石丸の物語を描くことを意図しながら、小伝次中心に描いてしまっている。

そのことは、秋成が捨石丸をどういう人物として描くかの視点をもきめかねていることにもつながる。捨石丸が「背六尺にあまり、肥ふとり、世にすぐれ酒よくのみくらふ」力持ちである点では一貫している。しかし、前半では、自分の血を小伝次親子にそそぎかけたため、下男たちに「主殺しよ」と叫ばれたのを怖れ、「扱は、父子ともに我あやまちしよ」と逃げだしたのだった。ところが、後半で角力になった頃には、主殺しはしていないのに、小伝次が国の守に命令され、敵討に出発したことを知っているのである。これは明らかに矛盾している。前半の捨石丸は、軽率で、馬鹿な男なので、主人を殺したと早合点して出奔したのに、後半では罪もないのに主殺しとされ、やむを得ず出奔した分別のある男というわけだ。

そもそも、作品の主題も極めてあいまいである。全体の半分以上を小伝次

の精神的成長を描くことにあてている。つまり、小伝次は親思いの、やさしくはあるが力弱い臆病者であったが、国の守から、捨石丸を討たねば財産を没収すると強迫され、武芸の修業をする。日高見神社の宮司が、姉の舅であったから、その人に武芸を学び、遂に心身共に錬られ、捨石丸を討ちに出発するのであった。小伝次のこの成長は決して表面的なものではなかった。だから、遂に捨石丸を探しあてて、彼が主人長者の供養のため、又人民のために巖をほり、道を切り開いている姿を見たとき、「家亡ぶともいかにせん。始あるもの必よ終ある、時なるべし」という心境に達することが出来たのである。小伝次が捨石丸を敵とせねばならなかったのは、家財産にとらわれたから。無欲に徹したとき、人間の真実な心を小伝次は見る事が出来たと言えるだろう。

勿論、秋成は捨石丸自身の精神的成長ぶりも語っている。それは西国に下って、酒毒で腰が立たなくなったとき、道を切り開くことを思いついたところにも表れている。捨石丸はこのとき自分の命などもう惜しくないと思っていた。そこで小伝次があらわれたとき、「我首うちていに給へ」とさえ言うことが出来た。だが、彼の悟り方は本物ではなく、内心小伝次のひ弱さを侮っていた。捨石丸は小伝次のすばらしい技を目のあたりにして、初めて「心奢りたるは愚也」という反省をした。つまり、捨石丸の一番の欠点は自分の力に対する過信だったというわけで、それを思い知らされたときに小伝次への尊敬と、謙虚な心が湧いてきたのである。これは捨石丸にとっての大きな成長であろう。だが、小伝次と比べてみると、それは程度の低いものであって、秋成の好んで語る「一文不知の僧と剛毅木訥の民とには、必ズ無の見成就の人あり」（胆大小心録）という姿からは遠い。

このように「捨石丸」は小伝次の精神的成長を描こうとしているのか、捨石丸の幼稚ながらも体得した謙遜を示そうというのか、明らかではない。

秋成は「捨石丸」を書くにあたって、主題においても、スジの運びにおいても、登場人物においても、焦点が定っておらず、創造の意識が集中できな

いでいる状態だということがわかる。

右のような傾向は「死首の咲顔」にも共通する。「死首の咲顔」は「捨石丸」の前に位置する作品で、「ますらを物語」と通称される渡辺源太騒動に素材を求めたものである。「ますらを物語」は、源太の男らしさへの共感が執筆の動機になっている。即ち、源太の妹が恋する右内の家に、源太と妹とがのりこみ、嫁にしてくれと談判する。と、右内の不在を知った妹が、首を撃ってくれ、ここで死にたいと頼んだので、源太が妹の首を撃ち、少しも騒がず朝食を食ったという。こういう源太に、秋成は古武士の豪胆さを感じてか、いたく驚嘆している。「死首の咲顔」はその延長線上に創作されたもので、源太にあたる人物元輔の男らしさと、その母の女丈夫ぶりとを描こうとしたものと思われる。ところが、物語の大半は、右内にあたる人物五蔵の描写で成っている。彼は親孝行で誠実な男なのだが、勇気と決断に欠け、結果として元輔の妹宗を苦めてしまう。それを、読者は五蔵と宗との、五蔵の父親によって妨げられた悲恋物語として読んでしまう。事実そうした解釈がしばしばなされている。けれども、巻末の、妹を殺した元輔の罪よりも、五蔵親子の罪が重かったという結論は、秋成の観方を表現するものであろう。「此事ことごとく五曹と曾次が罪におこる」という国の守の裁きや、目代の「五蔵が心いといとあやし」という言葉は、秋成が五蔵の生き方を非難していることを示すものである。秋成は元輔の男らしさを強調しようとしながら、相当する場面は宗を五蔵の家に伴ない、五曾次とはげしいやりとりをする箇所だけであった。元輔は全体の中で隈の方へ押しやられ、主役の座からすべり落ちた感がある。

この作品も「捨石丸」で示したように、主題においても、登場人物においても、焦点がぼけてしまい、熱情を創造へと集中させることに失敗している。

ところで、「捨石丸」の次に位置する「宮木が塚」では、秋成は宮木の悲劇へと焦点をしばって作品化することに、一応成功した。宮木の悲劇とは何か。それは父の失業と死、乳母の悪智恵とによって、遊女に売られた宮木の悲し

みであり、愛人河守十太兵衛との死別、十太兵衛の仇役藤太夫への服従であった。つまり、遊女としての宿命全体が宮木の悲劇だった。本来、遊女となるべき身分ではなかった彼女が「あさましき世わたりする」身へと転落したところに悲劇があったのだ。それ故秋成は文化五年本よりも、天理卷子本では、宮木の運命の過酷さを強調すると共に、遊女屋の主人夫婦の利己的な強欲ぶりが語られるなど、宮木の運命の悲しさを強調した。ところが一方、宮木の悲劇が単なる運命ではなく、彼女の意志によって選びとられたものであることも語られる。彼女には藤太夫に従っていれば、平安で豊かな生活が約束されていた。藤太夫は宮木を大事に思い、内室に迎えてもよいとすら考えていたのだから。しかし、宮木は自らの意志でその道を捨て、運命に翻弄されることを拒否し、十太兵衛への忠実を選んだ。かくて彼女は入水するのである。

このように見てくると、宮木の悲劇とは、運命に流されつつも、なお自らの正しい意志を通そうとする彼女の生き方にあるということがわかる。しかし、綜体的にみると、河守十太兵衛と藤太夫との間にくりひろげられる宮木をめぐる策略が中心部を占め、宮木のりりしい心情が、わずかしか描かれていない。読者にとっては、宮木の心情や生き方への共感よりも、宮木の運命への同情の方が重きをなしてしまう。とくに巻末に附された秋成の長歌が、遊女のはかない運命を詠っているので、ますますその感を強くする。宮木への人格的感動は薄れてしまっている。

かくのごとく、比較的感情を集中させることに成功した「宮木が塚」においても、それは充分とは言えない。

これは秋成が人間の出来事への感動の心を失った為であろうか。決してそうではない。「宮木が塚」に、あるいは『ますらを物語』に示されているように、秋成の創作の動機は自らの心に感動する素材にふれたときにふくらんでいくという方向は『雨月物語』の頃と変っていないだろう。ただ、彼は周辺の現象や状況が気になって、感情を一つのものに集中させることが出来なかったのである。

「捨石丸」において見たように、秋成は捨石丸を登場させるために、長者父子を述べはじめたところ、長者の死と、敵討から、小伝次の大丈夫ぶりまで述べたてていくのである。その結果、捨石丸自身については、数行で処理して、個性を描けなくなる。周辺のことにとこだわったため、肝腎のことがぬけてしまったのだ。それは「宮木が塚」でも、宮木の運命ばかりにこだわり、彼女の決断の心の美しさがあまり表現されずに終わってしまったことと同じである。

このように秋成は一つの話しへと意識がうつると、必要以上にその話しにとらわれ、全体のバランスを欠いてしまう。話しは混線したり、だらだらと長びいたりする。このとき秋成の意識は一つのところに停滞し、つまづいている。だから、停滞していることに気づくと、あまりにも早く結論へと急ぎすぎる。秋成は『雨月物語』を描いているときと同じように、内面の感動を作品化しようとする姿勢は持ちつづけているのだが、感情を集中出来がたい精神状況にあったことに起因する。

秋成は晩年、極めて情緒不安定な状態にあった。『よもつ文』は享和元年の作だから、『春雨物語』を書きはじめたかどうかわからぬ時期である。が、それによると、「今しもいきす魂などのさそひ出覧、いと覚束なく思う給へらるるなり、御むすめの御心になかはぬとて泣いたまへる」などとあるように、常にいらいらした気持や、せかされた思いにかられた精神状況だったことがわかる。同じ頃書かれた『北野賀茂に詣づる記』には、夢の中に「あやしき童子」があらわれ、西の方を指さし「汝休せよといひて立ち去りぬ」とあるのも、秋成の不安定な感情が反映しているものと思われる。

こうした情緒不安定な気分は文化3、4年頃にも襲ったとみえ、秋成は文化4年に「秋草稿」5束を古井になげこんでいる。彼はそのときの気持を「ふと思ひ立て」（胆大小心録）とのみ記し、投げ捨ててからは「心すゞしく成たり」（同全）と落ち着き払ったさまを誇示している。だが、この頃の秋成はしきりに住居を変えているから、いらいらした思いにせかされるような状況だっ

たのだろう。彼は住居を変えるにしても、殆んど前に住んでいたところを行ったり来たりであって、新しい所に行こうとしないのだが。……

このような精神状況が『春雨物語』の創作にあつて反映したが故に、熱情はくすぶりつづけていた。秋成の意識が停滞することは、物語の結論を急がず、ゆっくり語るとき、内容が充実していく傾向をも生みだす。つまり作品の長篇化である。それ故、『春雨物語』の最後を飾る「癡僧」が成功したとも言えよう。しかし、秋成は本格的長篇文学を完成させるまでには至らなかった。彼は王朝の物語文学の伝統に生き続け、各巻ごとに完結する世界に止まっていたからだ。

## 討議要旨

ロバート・ブラッワー氏から、『春雨物語』は内容ばかりでなく文体もしっかりしていないと思うがどうかとの質問があり、発表者から同感である。病中は意識の流れが散漫で、それに伴って文章も散漫になっているとの返答があった。

西勝氏から、創造性は文学の研究の場合常に作者の資質に還元されがちだが、創造性を法則性をもって分析できないものか、そしてそれを文学の作者の創造性を分析するときに使えるようにはできないものか、との質問があった。発表者から、創造性という言葉を使ったのは、作品を創り出した人間の心を理解するために必要な言葉として使ったので、創造性に法則性があるのかどうか、今はわからないとの返答があった。

井本農一座長から『春雨』の不安定さは秋成の晩年の病気、精神不安定に原因があるというのはそのとおりだが、作品としては不安定ではあるにしても、その作品にはそれ故に作者の不安定な精神がそのまま露呈しているという意味において読者は『春雨』にまた違った興味を抱くのではあるまいかというコメントがあった。発表者からも『春雨物語』は秋成の精神状況ときわ



めて密着した作品であり、秋成の晩年の精神の流れを識る上で興味のある作品といえるとの発表補足があった。